

炭鉱産業遺産関連施設

① いわき市石炭・化石館 収蔵・展示類

いわき市石炭化石館と 竪坑櫓・炭車・坑口銘盤・模擬坑道等

いわき市石炭・化石館は、本州最大の産炭地であった常磐炭田の歴史・遺産を収集展示、研究する施設であるとともに、貴重ないわき市内産出のフタバスズキリユウをはじめとする恐竜・化石の収集展示・研究を行う施設として、昭和59年（1984）に、当炭鉱地域の中心地であった湯本町の建設・開所された。ここには炭鉱の象徴的な



西部鉱竪坑櫓を含むいわき市石炭・化石館

建造物・常磐炭礦西部礦の竪坑櫓が現地より移設され聳えている。内部には最も入館者から興味が持たれている「模擬坑道」が設置されており、坑道内部が復元されている。その中には坑内事務所、年代順の置かれている採掘方法・場の模様が再現されており、炭鉱の仕事等が分かりやすく展示されている。また大型の採掘機械や高温での作業のための風呂場等も展示されている。

なお、この建設地点は常磐炭礦株式会社の採炭、選別、万石、搬送、専用鉄道、発電所、多くの坑口や炭住等が密集していた所であった。現在その面影は少ないが、更に湯本川改修工事で整備されて、殆ど当時の施設設備等の跡は消失している。

更に炭鉱社会の生活の様子を垣間見ることができる炭鉱生活コーナーでは様々な生活スタイルや道具、組合活動の模様を見ることができる。敷地内には石炭を燃料として使用された蒸気機関車の現物、戦争への鼓舞を目的に作成された「総決起」坑夫像、山麓よりのもと常磐炭礦ズリ山山麓近くに位置した第六坑坑口（昭和天皇入坑記念碑がある）等があり、炭鉱社会・産業に関する学習機能が揃っている。

② みろく沢炭鉱資料館内炭鉱作業用具等
みろく沢炭鉱資料館／渡辺為雄氏個人

渡辺為雄氏は昭和30年代にこの地の小さな炭鉱で働いていた方で、その作業等で実際に使用した炭鉱関係用具等を収蔵・展示している。

運搬用具・部品、タンガラ、カンテラ、懐中電灯、タガネ、ピックハンガー等（主として坑夫の採炭用具や広告・チラシ等の紙資料）総数206点がいわき市文化財として指定（平成19年2007）されている。その住いも徐来の炭鉱住宅であり、坑内運搬用トロッコも稼動状態で再現展示・運転見本がなされている。この場所は片寄平蔵が当炭田発見の地（弥勒沢）ともなったところとされ、石炭の露頭を見ることができる。

なおこの地点から東の国宝・阿弥陀寺に向かって昭和初期頃まで石炭運搬や従業者通勤路として実際に利用された山道が残されており、内郷ふるさと振興協議会メンバーの「みろく沢石炭（スミ）の道」案内人ボランティア活動が行われている。

（大谷 明）



みろく沢炭鉱資料館内展示風景

後記 これまで記述してきた論稿は下記の資料を参考とした。文中いちいち典拠を断らずに述べてきたが、詳しく考察する場合は下記の資料を参照願う。

<常磐炭田地域の産業遺産に関する参考資料>

- ② 常磐炭田史研究会機関誌創刊号から第6号
- ③ 常磐炭田史研究会編集「いわきの産業遺産ガイド」
- ④ いわきヘリテージツーリズム協議会発行「いわきの減りテージ・ツーリズムマップ」
- ⑤ 常磐炭田史研究会作成・平成19年度経済産業省「常磐炭田地域・認定産業遺産分布図」
- ⑥ 内郷ふるさと振興協議会「内郷たから物みて歩き」
- ⑦ 常磐炭田史研究会発行「写真が語る常磐炭田の歴史」
- ⑧ いわき未来づくりセンター発行「いわき市の合併と都市機能の変遷」
- ⑨ おやけこういち著「常磐地方の鉱山鉄道」「黒ダイヤの記憶」他
- ⑩ いわき市編纂「いわき市史」第3・4巻「近代」、第5巻「自然・人文」、別巻「常磐炭田史」
- ⑪ 北茨城市編纂「北茨城市史」下巻、別巻3・4
- ⑫ 鈴木貞夫著・歴史地理学会紀要25他論文
- ⑬ いわき市立美術館編集「炭鉱（ヤマ）へのまなざし」所載論文
- ⑭ 岩間英夫著「ズリ山が語る地域誌」

その他、常磐炭田史研究会会員各氏の助言等をいただいた。また、掲載した写真・図版は、同研究会会員が調査補助員として活動して制作した成果である。